

第1回 防府市人権学習市民セミナー

日時：令和8年8月28日（金）

午後1時30分から午後3時まで

会場：防府市創業・交流センター 多目的ホール

【障害者問題】

演題：知って欲しい私たちのこと
視覚障害を生きる。
私と盲導犬との出会いと絆

講師：岡藤 みゆき & 盲導犬 テル さん



当事者の方からお話を聞き、気持ちや思いが知れてよかったです。盲導犬について知る機会、あまりないので、盲導犬がどんな生活を送っているのかというお話が印象に残りました。
(参加者アンケートより)

● 視覚障害者について

1 自分のこと

先天性白内障、緑内障で生まれ、幼少期は虫眼鏡のような分厚い眼鏡やいじめに悩み、辛いことは両親に話すことはなく、消えてしまいたいほどの辛さに耐えていた。

しかし大人になった今、同じ障害を持つ仲間や温かい人々に支えられ、「視覚障害者でよかった」と思えるまでに至った。人に傷つけられた心は、人とのつながりによって救われるのだと感じた。

● 視覚障害者について

2 視覚障害と子育て

夫婦ともに視覚に障害があり、弱視の夫に手伝ってもらいながら、二人で助け合って育児をした。ミルクの量や赤ちゃんの居場所が分からないなど試行錯誤の連続で、爪切りは口の中で舌を使って長さを見極め歯で切ったり、服に鈴を付けて音で居場所を把握したりと工夫を重ねる毎日だった。

障害の進行に落ち込む暇もないほど子育ては待ったなしだったが、周りの方々に支えられ、育児を楽しむことができた。

大変なこと以上にたくさんの喜びをもらい、子育てを通して私自身が親として育ててもらったと感じた。

● 視覚障害者について

3 視覚障害の生活

「見えないからできない」のではなく、「どう工夫すればできるか」料理では視覚以外の感覚をフル活用し、物を定位置に置く。見えない生活は工夫と記憶の連続だが、諦めずにやり方を探すことで暮らしは豊かになる。

身近なユニバーサルデザインに加え、スマホやAIの登場は視覚障害者の見ている世界を大きく変えてくれた。障害者も高齢者も、すべての人が共に暮らせる社会になることを願っている。

● 視覚障害者について

4 白杖と点字ブロックについて

視覚障害者の移動手段には「同行援護」「白杖」「盲導犬」の3つがある。

白杖は、全盲の人だけでなく、見えにくい人(弱視)も持つ。白杖は周囲に目が不自由であることを伝え、安全に配慮してもらう。

また、日本の岡山県発祥の点字ブロックには、丸い「警告」と線状の「誘導」の2種類があり、見えにくい人は黄色い線を見ながら歩いている。

白杖も点字ブロックも、見えない人、見えにくい人が安全に歩くための大切なものであり、点字ブロックの上には物や自転車や車を置かないように気を付けて欲しい。

● 盲導犬について

1 盲導犬との出会い

幼い我が子の「お母さん、一人で学校に来てほしい」という言葉。手を繋いで私を誘導してくれる子の思いに応えたくて、私は盲導犬と歩む決意をした。

盲導犬が来てくれたおかげで、参観日へ行くことも、熱を出した子をすぐに迎えに行くこともできるようになった。親として当たり前のことをしてあげられる喜びと自由を、盲導犬が運んでくれた。

子どもが成長した今は、「これからはお母さん自身のために」という言葉に背中を押され、3代目のパートナー「テル」と共に行きたい場所へ自由に出かける毎日を送っている。

● 盲導犬について

2 盲導犬の役割

盲導犬の役割は「段差」「曲がり角や交差点」「障害物」を教えること。

行き先を伝えれば勝手に連れて行ってくれるわけではない。ユーザーの指示のもと二人三脚の共同作業で歩いている。信号の色は分からないため、「赤ですよ、青ですよ」と声をかけていただけることが大きな助けになる。

ハーネスはお仕事のスイッチであり、お互いの気持ちを伝え合う心をつなぐ道具である。家でハーネスを外せば、甘えん坊な家族に戻る。

盲導犬はロボットではなく、褒められるのが大好きな心のあるパートナー。完璧ではないからこそ、お互いに支え合い、補い合って歩んでいる。

● 盲導犬について

3 盲導犬と街で出会った時と視覚障害者への声のかけ方と支援

補助犬はどこでも一緒に入ることができる。

身体障害者補助犬法により、お店や病院、電車や飛行機などの受け入れが義務付けられている。盲導犬はユーザーの体の一部であり、大切なパートナーである。

盲導犬に街で会ったときの4つのお願い。ハーネスをつけている時はお仕事中。「名前を呼ばない」「目を合わせない」「触らない」「食べ物を与えない」を守って欲しい。パートナーには声をかけてはいけないが、ユーザーには声をかけて欲しい。「何かお手伝いしましょうか？」「どういったサポートが必要ですか？」と声をかけて欲しい。（必要なサポートは一人ひとり違う。もし断られても、優しく見守っていただけると嬉しい。）

● 盲導犬について

4 最後に

街のバリアフリーの整備が進んでいるが、人々の心のバリアは、なくなっていない。大切なのは、相手の立場に立って考える「心のバリアフリー」である。

工夫や努力で乗り越えた喜びは、次のチャレンジへの力になる。

障害があることは「かわいそう」な人ではない。「不便」であって、「不自由」ではない。一人ひとりの意識が変わり、共に歩める社会になることを願っている。

市民セミナー参加者アンケートより

- 当事者のお話を拝聴し、視覚に障害のある方の暮らしぶり、盲導犬のこと、スマートフォンの操作のこと、私達がどのような意識をもち、かかわっていったらよいか、具体的に知ることができました。
- 視覚障害者の方にとって、盲導犬がいかに大切なパートナーであるかということ、盲導犬は完璧ではないということ、周囲の声かけがいかに大切かということなどを学びました。施設のバリアフリーは進んでも社会、心のバリアフリーは進んでいないという言葉は胸に響きました。